被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁（えにし）

教訓が、いのちを救う。
3.11 DENSHO ROAD

2024 vol.10

津波被害 二つの出来事に焦点
釜石市・いのちをつなぐ未来館

「いわき語り部の会」会長の大谷さん
気仙沼市立階上中学校
被災地を結ぶ高規格道路
相馬市原釜・津神社
被災地は「千年希望の丘」に 岩沼市
キャッセン大船渡
道の駅「南相馬」

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構

田老の防潮堤（宮古市）

津波被害 二つの出来事に焦点

釜石市・いのちをつなぐ未来館

東日本大震災の津波被害による人命を巡り、二つの出来事が隣り合わせになった釜石市鵜住居地区。大槌湾に面したこの地区は津波で壊滅したものの、復興が進み、2019年3月に鵜住居駅前地区公共施設「うのすまい・トモス」がオープンしました。構成施設の一つ「いのちをつなぐ未来館」は、震災の出来事や教訓を伝えるとともに、災害から未来の命を守るための防災学習を推進する施設として活用されています。

開館時間／9:30～17:30（11～2月は17:00）
休 館 日／水曜、年末年始　　入館無料

防災学習の推進にも力を入れている「いのちをつなぐ未来館」

鵜住居地区は震災時、釜石東中にいた生徒たちが率先避難者となり、鵜住居小児童や地域住民ら総勢約1000人が高台を目指し、津波から逃れました。釜石市では震災前から防災教育を核にした「命の教育」に取り組み、その中で「津波から命を守る『津波避難三原則』」を示していました。「想定にとらわれるな」「その状況下において最善を尽くせ」「率先避難者たれ」。生徒たちが主体となり多くの人が避難できたことは後に広く知れ渡りました。

一方で震災1年前に開所した「釜石市鵜住居地区防災センター」は、津波の避難場所ではなかったものの、名称に「防災」が付き、この施設を利用した津波避難訓練を行ったことがあるなど、いくつかの要因が重なり、結果的に多くの住民が避難しました。津波はセンターの2階天井付近まで達し、避難者196人のうち162人が犠牲となり、この悲しみは多くの人の胸に刻まれています。

緊迫感が伝わる展示

いのちをつなぐ未来館は、これらの出来事を紹介する展示を通じ、命の大切さを伝えています。第1展示室「東日本大震災と釜石」では、発災1週間の動きを時系列で紹介。市職員の手書きメモも並び、緊迫感が伝わってきます。津波で被災した携帯電話や小学生の登校帽は泥が乾いた状態で展示されています。

第2展示室は「鵜住居地区防災センターの出来事」がテーマで、なぜ悲劇が起きたのかを解説。センター2階ホールに取り付けられ、津波襲来とみられる時刻で針が止まっている時計も展示されています。第3展示室「釜石の子どもたち」は釜石東中と鵜住居小の生徒・児童らの震災直後の避難ルートを距離や高低差、時間、避難途中の出来事などをパネル展示。

また、震災当日は午前授業だった釜石小の全児童184人が、それぞれの場所から高台などへ避難し全員無事だったことも紹介。下校時津波避難訓練や津波防災授業など防災学習を思い出し自らの命を守った事例は、日頃の取り組みがいかに重要かを説いています。

館内には他に、震災関連の書籍などが並んだ資料閲覧室、企画展やワークショップなどで使える防災学習室もあります。

所在地／釜石市鵜住居町4-901-2
TEL0193-27-5666

防災意識の底上げ図りたい

いのちをつなぐ未来館スタッフの皆さん

うのすまい・トモスは三陸鉄道・鵜住居駅に隣接し、「東日本大震災の記憶や教訓を将来に伝えるとともに、生きることの大切さや素晴らしさを感じられ、憩い親しめる場」として複数の公共施設を一体的に配置し、地域活動や観光交流を図る場になっています。トモスには復興の明かりを「灯す」「共に」「友」を意味する言葉の響きと、鉄のまち釜石の炉をイメージした言葉で表現。いのちをつなぐ未来館の他に、防災センター跡地でもある震災犠牲者慰霊追悼施設「釜石祈りのパーク」、駅出入り口横の観光交流拠点施設「鵜の郷交流館」があり、株式会社かまいしDMCが指定管理者となっています。

左から佐々木さん、川崎さん、千葉さん、菊池さん

取材時、未来館では4人のスタッフが、来客対応や事務などに当たっていました。今年1月、うのすまい・トモスの統括マネジャーとして着任した菊池啓さんは釜石市出身で、Uターンで戻ってきました。震災時は勤務先の仙台市中心部の高層ビルで激しい揺れを体験。「釜石の震災当時の出来事を具体的に知ったのはUターンしてから。現在、集中的に勉強しています」と話します。

他の3人も震災の出来事を今も生々しく覚えています。千葉麻美子さんは「出産直後で、実家から外に出てみると川の水があふれた光景に、かえって現実感がなかった。ふと、われに返り、子どもを守らなければと、高い所に避難しました」と語り、佐々木智恵さんは「車の運転中に突然の激しい揺れで、緊急地震速報が追い付いていなかった。停電もあり、情報が全く入ってこないことが心配でした」と振り返ります。

震災時の緊迫した様子が伝わる展示

未来志向型の施設

未来館には昨年度、年間で約2万7000人の来館がありました。「まずは震災という事実に向き合い、そこで得た教訓や助かった事例などから、どのような備えが必要なのかを考える。未来館はまさに未来志向型の防災学習施設でもあります」と話す川崎杏樹（あき）さんは震災時、釜石東中2年生で、学校から避難した生徒の一人でした。

児童・生徒の校外学習や企業・団体の研修などで、これまでにも多くの人が未来館に足を運んでいます。「子どもたちは一生懸命メモを取るなど、自分なりに知ろう・学ぼうとしている。大人の皆さんは危機管理の面で、防災センターのことを気にされます」とスタッフは語り継ぐことの大切さをあらためて実感しています。

今年1月1日の能登半島地震でも津波が発生しました。菊池さんは「特に津波防災の観点で、当施設はお役に立てることがあると思う。防災意識の底上げを図るとともに、地域差が生じないように取り組んでまいりたい」と強調します。

未来館では館内の無料ガイドをはじめ、防災ワークショップ、鵜住居地区の避難路追体験や水門・防潮堤見学といった現地体験プログラム、オンラインでの語り部や遠隔授業などにも対応しています。

震災慰霊碑やこの地を襲った津波の高さ11（メートル）を示すモニュメントなどがある「釜石祈りのパーク」

地元の薄磯で被災経験語る

「いわき語り部の会」会長の大谷さん

いわき市薄磯地区にある「いわき震災伝承みらい館」で震災語り部として活動する男性がいます。同地区を襲った最大高8・5メートルの大津波から必死で逃げた自らの経験をもとに、「他人はあなたの命を守ってはくれない。自分の命を守れるのは自分だけ」と訴えています。

昨年大病を患い、取材日が復帰後初仕事だった大谷さん。語り部活動を通して人と交流できることが活力になっているといいます

「いわき語り部の会」会長を務める大谷慶一さんは発災直後、ラジオで「15時10分に小名浜へ10メートルの津波が到達する」という情報を耳にし、時間になっても津波が来る気配がないことから海を見に行きました。

防潮堤の階段を上がって目にしたのは、波が水平線に向かって引いていくこれまで見たことがない光景。「これは大津波が来る」と思いすぐさま自宅へと引き返しました。

妻の加代さんと、近所に住む90代と70代の女性2人を連れて裏山を目指した大谷さんでしたが、足が不自由な90代の女性を背負っていたため思うように走れません。ずり落ちる体を背負い直そうと振り向いた時、土煙と共に津波が目前に迫っていました。それを見た瞬間、全員を置き去りにして全速力で山を登ったといいます。

幸いにも加代さんと、一緒に逃げた70代の女性は避難できましたが、背負っていた女性は、3日後に遺体で見つかりました。「置き去りにしてしまったおばあさんの目が心に焼き付いて離れません」と大谷さん。

この経験は誰にも言えず胸にしまいこんでいましたが、翌年のお盆に知人に泣きながら打ち明けたところ、すっと肩の荷が下りたといいます。この出来事をきっかけに「自分の経験を抱え込まず発信していこうと思うようになりました」

生の声が必要と訴え

2012年からいわき市主催の被災地スタディツアーで語り部活動を始めた大谷さん。がれきが残る薄磯の海岸沿いを歩きながら当時の出来事を話しました。「初めは被災経験を話すことにためらいがありましたが、ここで起きたことを伝えることが自分に与えられた使命と思いながら活動しました」。

20年に開館した「いわき震災伝承みらい館」は当初、展示のみで語り部の講話を想定していませんでした。それを知った大谷さんらが「被災者の生の声は絶対に必要」と訴えたことで、同施設での語り部活動が始まりました。現在は海岸沿いの薄磯・豊間出身者をはじめ、元原発作業員や内陸で地震の被害に遭った人など16人の語り部が登録し、それぞれの被災体験を語っています。

大谷さんは講話の冒頭、津波の映像を流しながら「この真っ黒な水の中に人がいることを想像できますか」と来館者に語りかけます。「実際に経験していない人にどんな言葉で話せば伝わるかを常に考えている」と言い、防災士の資格も新たに取得しました。

「記憶に新しい能登半島地震など身近で災害は起きています。いざという時自分の命を守れるのは自分しかいないということを、これからも伝えていきたい」と力を込めます。

講話は土・日曜、祝日の10:30～11:30と14:00～15:00の2回開催。予約不要で聞くことができます

所在地／いわき市薄磯3-11
TEL0246-38-4894

語り部をしている気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館で。左から後列が3年熊谷峻さん、2年小野寺智哉さん、3年畠山愛衣さん、前列が2年鈴木希空さん、3年三浦大和さん、2年吉田都吾さん

震災遺構で生徒有志が語り部

気仙沼市立階上中学校

気仙沼市立階上中学校（一丸孝博校長）は防災教育に力を入れ、生徒有志は東日本大震災の語り部として活動しています。現在の中学1～3年生は震災時0～2歳。当時の記憶はおぼろげですが、学校での学びや住民から聞いた体験談を踏まえ、学区にある気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の見学者に伝えています。

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は東日本大震災で巨大津波が襲った気仙沼向洋高校の旧校舎を活用し、震災の記憶と教訓を伝える場として2019年3月に開館しました。月命日の11日付近の土曜または日曜には、地元中高生の有志による語り部活動「みんな語り部」を実施。階上中の生徒は当時の校長の提案で、同年10月から活動しています。

24年最初の活動日となった1月7日午前の部には、2、3年生6人が参加。全員が経験者で、始めた動機は「姉が中学生の時に語り部をしていた」「避難所にいた記憶があり、震災を語り継ぎたい」などさまざまです。

3年の熊谷峻さんと三浦大和さんは、震災当時校内にいた人々の行動や、津波の爪痕を説明しながら、1階から屋上まで約1時間かけて関西などからの見学者を案内しました。三浦さんは「見学者の方の理解度によって、説明の仕方を変えています」と話します。

中学生は最初、同館で語り部を行う「けせんぬま震災伝承ネットワーク」のメンバーに指導を受け、大人や高校生とペアを組んでいましたが、最近は中学生ペアでガイドする機会が増えています。同館の福岡麻子さんは「安心してお任せできます」と信頼を寄せます。

見学者に希望に応じて30分～1時間半程度でガイドしています

学校では防災学習

階上中学校では総合的な学習の時間に防災学習を行っています。陸前高田市や石巻市の震災遺構などを訪問。気仙沼市総合防災訓練の日、生徒は午前に各自治会の防災訓練に参加し、午後に学校の体育館で避難所初期設営をします。

熊谷さんは「学校では主に防災・減災という未来を学び、語り部活動は過去の出来事や記憶を伝えています。未来も過去も大切。語り部として、震災を経験していない遠方の方、震災を知らない若い世代にも、分かりやすく伝えていきたいです」と力を込めます。

物流や観光などに大きな役割

被災地を結ぶ高規格道路

三陸沿岸道路（三陸道）は、仙台市と八戸市を結ぶ総延長359キロの高規格道路。2021年12月の全通から2年が経過し、沿線住民の日常的な利用はもちろん、物流や観光など広域移動の面でも大きな役割を果たしています。リアス海岸を貫く道路だけに、橋やトンネルなどの構造物が多く、日々の点検や修繕が欠かせません。釜石市にある国土交通省東北地方整備局南三陸沿岸国道事務所（武田哲英所長）に話を伺いました。

青空をバックに白の主塔や橋りょうなどが映える気仙沼湾横断橋

南三陸沿岸国道事務所は三陸道の鳴瀬奥松島～山田南インターチェンジ（IC）間175キロを管理しています。総延長のほぼ半分を占める路線を担当し、道路の管理に日夜取り組んでいます。

管理区間の中で特徴的な構造物は2021年3月に供用開始し、三陸道のシンボルともいえる気仙沼湾横断橋（愛称・かなえおおはし）。気仙沼湾をまたぐ全長1344メートルで、海上部は2本の主塔とケーブルで橋桁を支える「斜張橋」と呼ばれる形式です。主塔は海面からの高さが115メートル（ビル30階相当）で、2本の主塔間の長さ360メートルは東北最大です。

車で通行すると、橋からは気仙沼市の魚市場や市街地、大島などが見渡せますが、あっという間に通り過ぎてしまいます。震災級の災害にも耐えられる構造、デザインや色彩、橋の下を通る船舶への配慮など、橋そのものにも多くの魅力や秘密が隠されています。国内有数の漁港の一つ、気仙沼港が間近にあるだけに、橋の下面には「貴船の帰港を歓迎する」「貴船の安全航海を祈る」を示す国際信号旗が描かれています。

主塔と橋桁を結ぶケーブルは、約150～360本の細い鉄のケーブルを集束させて、1本の太いケーブル（直径120～165ミリ）を構成。このケーブル40本で約5900トンの橋桁を支えています。橋桁は内部が高さ2・1メートルの空洞で人の歩行が可能で、主塔の内部も階段やはしご、2人乗りのエレベーターがあり頂上部まで移動でき、日常的に職員が立ち入り、点検を重ねています。

橋の下部に描かれた国際信号旗

土木系学科の高校生たちが主塔を見学

より高精度の管理へ

さらに、橋の状態を評価する目安として、構造各部の初期値計測やモニタリング計測を2020年度に始めました。主塔が傾いていないか、ケーブルの腐食具合はどうかなどを調べる上で必要なベースとなるデータを集め、より精度の高い維持管理につなげていきます。

事務所では「巨大な橋なので造る当初から高耐久を前提にしているが、これから長く使っていく中で変化があり得る。異常時にデータを測って分析しようにも、比較検討するものがないと評価できない。ケーブルの確認もロボットを使うことなどを検討しています」と話します。

多様なルート選択

東北道と三陸道を結ぶ横軸として、釜石道やみやぎ県北道路、東北中央道が全通したことで、物流の速達性向上や多

様なルート選択が可能となりました。児童・生徒の教育旅行も行き先の選択肢が広がり、岩手県の場合、従来からの平泉町や雫石町など内陸部に加えて、釜石道を経由して沿岸部の震災伝承施設を見学するケースが増加。宮城県でも日本三景・松島の最寄りＩＣが三陸道にあり、県内の各震災伝承施設とのアクセスが容易です。

三陸道の沿線は、もともと風光明媚な観光スポットが点在し、郷土色にあふれた祭りも四季折々に開催されています。加えて各地に震災伝承施設があり、三陸道はこれらの地域を車で巡る旅行者の利便性を高めています。

毎年10月に陸前高田市で開かれる三陸花火競技大会の来訪者アンケートでは、２０２１年調査と22年・23年調査の二つを比較すると、三陸道を利用しての来場が約８％増えて65・６％となりました。岩手県外の来訪者の居住地は宮城県が27％から30％、青森県が１％から８％、他の東北３県が６％から７％にアップ。青森県からの来訪者増は三陸道全通の効果と見込まれ、今後も期待されます。

三陸道の利用者からは「渋滞もなくスムーズで、走りやすくとても快適だった」「資材搬送などで時間短縮によりコストが削減できる」「宿泊地の選択の幅が広がった」などの声が聞かれます。

北向きランプの整備も

南三陸沿岸国道事務所では安全通行や利便性向上に向け、改修作業に当たっています。歌津北ＩＣは現状で仙台方面の行き来のみのハーフＩＣですが、災害時の緊急輸送道路の確保や物流支援などアクセス強化を図るため、気仙沼方面にも行き来できる北向きランプの改良工事を行っています。

２車線区間で対向車線へのはみ出しを防止するためのワイヤロープ設置は、トンネルや長大橋りょうなど構造上困難な箇所を除いて完了しました。車の正面衝突の抑止につながっている半面、ワイヤロープの接触事故が多く、通行止めの原因にもなるため、より一層の安全運転を呼び掛けています。

道路の補修工事の際は、夜間通行止めを行います。事前にマスコミや沿線の道路情報板などで告知を図っていますが、通行止めを知らないドライバーが思いのほか多く、事務所では「夜間に通行を予定している方は、ウェブサイトなどでご確認を」と呼び掛けています。

地域の絆も守る村社

相馬市原釜・津神社

古くから津波災害の被害を免れてきた伝承が残る相馬市の「津神社」。東日本大震災でも津神社へ避難した多くの人たちの命が救われました。

「東日本大震災の津波は津神社の坂まで押し寄せ、鳥居のすぐ下までがれきになってしまいました」と振り返るのは、2011年9月から中村東部一区区長を務める熊谷秀治さん。

津神社は地元で「津の神社」「津の水はん」とも呼ばれ、健康祈願や海上安全、大漁祈願、五穀豊穣などを願う人々から信仰を集めてきた地域の鎮守です。古くから津波が来た際の避難の目印とされ、熊谷さんも「父親から津神社までは津波は来ないと聞いていました」と話します。

縁起によると、塩焼きをしていた翁夫婦が村内のほこらを詣でたところ白い石のようなものを見つけ近付くとそれが白狐になり、以降「白狐明神」として祭るようになったとされています。その後「津明神」として現在の場所に移され、明治期に「津神社」と改称されました

当時の北原釜地区にはかつて250世帯が暮らしていましたが、津波の被害を受けなかったのは神社周辺の18世帯のみ。南原釜地区も210世帯のうち100世帯が流され、南北の地区が統合された現在の原釜地区に暮らすのは135世帯だけに。

そこで熊谷さんたちは、それまで旧暦3月15日に固定されていた津神社の春の例祭日を震災後、4月の第3日曜に変更しました。

「震災後、地域の住民たちは散り散りばらばらになってしまいました。祭りを継続し、にぎわいをつくるために日曜に行うことで幼稚園や保育園、小中学校の子どもたちにも参加してもらえるようにし、盛大に行うようになりました」と熊谷さん。例祭では町内をみこしが練り歩き、地域に伝わる獅子舞や剣舞などとともに、太鼓や吹奏楽演奏、よさこい、フラダンスといったステージも披露。地区外に転居した人たちも一部戻って、地域はにぎわいを取り戻します。

中村東部一区区長・熊谷秀治さん

かつて消防屯所も兼ねていた神社の集会所は震災後に建て替えられ、現在は避難所になりました。普段、神楽の練習場として使われている2階には、非常時に備え寝具なども備蓄されています。

集会所では市の防災訓練に合わせ、住民による芋煮の振る舞いが行われるのが恒例。芋煮の準備が炊き出しやテント設営など災害時のシミュレーションの機会にもなっています。

●津神社　相馬市原釜大津239
●相馬市伝承鎮魂祈念館
福島県相馬市原釜字大津270
TEL0244-32-1366

震災前の写真も

津神社から車で約5分の「相馬市伝承鎮魂祈念館」では震災前の原釜地区のシンボルとして津神社を写真パネルやジオラマで紹介。

平安時代の貞観地震津波、1611年の慶長三陸地震の際も津波が神社すぐ近くまで迫りながらも無事だったという伝承や、東日本大震災で津神社に避難した人々が無事だったエピソードとともに、震災前の津神社の獅子神楽の写真も展示しています。

集落跡に多重防御の一つとして整備された「原釜・尾浜防災緑地」は震災伝承施設（第2分類）の一つ。緑地の案内図横に津波避難場所である津神社の方向を示す案内板も立っています

震災4年余りで集団移転

被災地は「千年希望の丘」に 岩沼市

岩沼市は東日本大震災の津波で被災した自治体の中で復旧・復興の「トップランナー」といわれました。中でも津波で壊滅した6地区の住民が1カ所にまとまる集団移転は先進事例の一つで、現在は移転地に公共施設や大型商業施設なども完成し、新たな街として機能しています。6地区は復興のシンボル「千年希望の丘」に生まれ変わり、震災伝承や防災学習の場として活用されています。

自然と調和した環境の中、住宅が整然と並び、住民主体のまちづくりが進む玉浦西地区

お話を伺った方
佐藤淳一市長

岩沼市は震災で最大10・5メートルの津波が直撃し市域の48%、仙台東部道路の東側は浸水被害を受けました。人的被害は2014年1月末時点で市内での直接死180人、関連死6人、行方不明1人、重軽傷者293人。住家被害は2012年11月末時点で全壊736戸、大規模半壊509戸、半壊1097戸を数え、最大時で震災翌々日6825人が避難しました(避難所26カ所の合計)。

佐藤市長は衆議院議員秘書を経て2012年1月から岩沼市議、22年1月からは議長も務め、同年6月の市長選で初当選。震災直後は連日のように県南沿岸部の避難所を回り、東京から来た物資の配分や被災者の要望を聞き取りました。

「岩沼市総合体育館で、親族らが亡くなった悲しみを表に出さず、窮屈な避難生活を我慢していた被災者の皆さんを見て、胸に込み上げるものがありました」と振り返ります。

当時は住まいの確保が最優先課題。岩沼市内にはプレハブ仮設住宅384戸を順次設置、被災地で最も早く4月29日に入居開始、6月4日に完了し2016年4月に閉所。みなし仮設住宅は最終的に705戸となりました。被災した沿岸6地区の方々が話し合いをして、集団移転先として11年11月に玉浦西地区に決まり、翌12年3月に防災集団移転促進事業がスタート。震災から4年余りの15年7月に「玉浦西まち開き」を迎えました。

「千年希望の丘」の慰霊碑

当時、市議の立場で復旧・復興に携わった佐藤市長は「各地区のコミュニティーを維持しながら一つのまちに集約し、将来に備えることは岩沼市の規模感や都市計画の面からも良い方向でした」と語ります。

これからが正念場

財源的にも国や県にかかるところが大きい復興事業が一段落したタイミングで市長に就任し、「市としてこれからのまちづくりをどうすべきか、むしろ正念場だと思う。国道4号や6号、JR東北線や常磐線、仙台空港など岩沼は本来恵まれた地域。周辺自治体とも連携し産業団地の整備や子育て世代に魅力的な生活環境を提供していきたい」と強調します。

仙台空港の周辺には、道の駅ならぬ「空の駅(仮称)」の整備を計画。地場産品の販売や食の提供、滑走路を望める温浴施設などの設置を目指しています。

集団移転した6地区の元々の場所ごとに設けた公園と、これらを園路(緑の堤防)で結んで一体化した「千年希望の丘」は岩沼市の震災伝承や防災学習の拠点です。植樹が一段落し、やがて大きな森になり、「自然探究の場にもなるのでは」と佐藤市長は期待を寄せます。

「市職員も震災を経験していない人が増えている。折りに触れ当時の出来事の共有を図るが、実際に経験した人とそうではない人との差はどうしても出てくる。震災の何を、どう伝えたいのか。検討すべきことはいろいろあるが、大切な部分を伝え、発信するのは公的機関の役割。岩沼市は被災自治体としての使命だと思っています」と言葉に力を込めます。

「防災×観光」を推進 人が集う学びの場に

キャッセン大船渡

東日本大震災の大津波で住宅や商店街が被災した大船渡市の中心部は、新たなまちづくりが進められ、そのシンボルともいえる商業施設「キャッセン大船渡」が2017年4月にオープンしました。震災前から地元商店街にあった店や、震災後開業した店が入居。人々が集い、防災を学べる場としても環境を整えています。

今年も3月11日から4月上旬まで「竹あかり」を開催します

震災後、大船渡市は津波被害のあった約10・4ヘクタールを商業・観光の拠点にしようと整備。大規模な嵩上げ工事を経て、その中心に「キャッセン大船渡」が誕生しました。市や大船渡商工会議所、企業、金融機関の9団体が出資して設立された、まちづくり会社「株式会社キャッセン大船渡」が運営しています。

現在は飲食や物販、ライブハウスなど約30軒が並びます。周辺にはショッピングセンターやホテル、ワイナリー、ライダーの休憩所「バイクの駅大船渡」などがあり、一帯を「キャッセン大船渡エリア」と称して、地域の活性に取り組んでいます。

震災を疑似体験

三陸沿岸道路の仙台―八戸間が全線開通し、アクセスが向上。「立ち寄ってもらえる商業施設に」と、さまざまな試みを行っています。

その一つが、2022年に運用を始めた防災学習プログラム「防災×観光 アドベンチャー あの日」です。「キャッセン大船渡エリア」にQRが付いた約30個のボックスを設置。参加者はボックスを探してスマートフォンでQRを読み込み、震災の体験談を聞いたり、災害時の行動の選択を考えたりと、震災を疑似体験できます。

「あの日」のボックスをキャッセン大船渡エリアに設置

「キャッセン大船渡」で雑貨店を切り盛りする小泉洋さんは「大きな揺れの後、自宅がある高台から海の水が引いていくのを見て、さらに高台へ避難しました。当時は飲食業をしていて、店があった中心部へ行けたのは津波襲来から数日後。店も、周りの住宅街や商店街も流され、悲惨な光景でした」と振り返ります。「震災を風化させてはいけない」と、「あの日」では語り部として登場しています。

「キャッセン大船渡」まちづくりプロデューサーの千葉隆治さんは「『あの日』は県内外からの教育旅行でも活用されています。エリア一帯を学びのフィールドにしてもらえれば」と願います。

多彩なジャンルの店が集まり、楽しく散策できます

「キャッセン大船渡」の開業後、鎮魂のイベント「3・11キャッセン竹あかり」を毎年3月に開催。商店街の店主や市民らで「竹部」を結成し、竹の伐採や竹に穴を開ける作業に取り組んでいます。竹部の代表でもある小泉さんは「高校生ら若い世代も竹灯籠作りに参加してくれています。震災を語り継いでいくためにも続けたいです」と思いを語ってくれました。

所在地／大船渡市大船渡町字野々田12-33
TEL0192-22-7910

第2分類

●**大船渡市民体育館前屋外時計** 大船渡市盛町字中道下1-1（大船渡市民体育館付近）●**潮目** 大船渡市三陸町越喜来字肥ノ田30-10 ●**茶茶丸パーク時計塔** 大船渡市大船渡町字茶屋前地内 ●**夢海公園** 大船渡市大船渡町字茶屋前103-3外37筆 ●**ど根性ポプラ（大船渡市浦浜地区緑地公園）** 大船渡市三陸町越喜来字杉下254 ●**津波警報塔（加茂神社境内）** 大船渡市大船渡町字笹崎地内 ●**津波記憶石第26号** 大船渡市三陸町綾里字宮野（三陸鉄道綾里駅前）●**津波記憶石第27号** 大船渡市三陸町吉浜字上野1-3地先 ●**大船渡市防災学習館** 大船渡市赤崎町字山口80-38 漁村センター内 ●**震災伝承看板「津波の教訓を生かした粘り強い防波堤（大船渡港湾口防波堤）」** 大船渡市大船渡町笹崎 サン・アンドレス公園 展望台3階 ●**南相馬市メモリアルパーク** 南相馬市原町区北泉字地蔵堂地内

住民の日常取り戻す 3カ月後に営業を再開

道の駅「南相馬」

国道6号沿いにある道の駅「南相馬」は、津波被害を免れたことから、震災時には自衛隊や警察の集合拠点となった他、支援物資の配給所として住民支援に当たりました。館内では3月17日(日)まで同市出身の写真家・大槻明生さんによる、震災の記録写真展を行っています。

市立病院や警察署が隣接する市の中心部にあり、長屋風の造りが特徴的な建物

市の伝統行事「相馬野馬追」ののぼりがはためく道の駅「南相馬」は2007年に開設。地元で採れた野菜や加工品、土産物などを扱う物産館の他、「野馬追カレー」や「みそタンメン」が名物の食事処などがあります。道の駅の裏手には震災後に整備された高見公園があり、元気な子どもたちの声が響きます。

話を伺った駅長の但野淳さんは南相馬市生まれ。道の駅のオープン当初から在籍し、21年に駅長に就任しました。「あの日、激しい揺れに襲われた後、すぐにお客さまを安全な場所へ誘導しました」と当時の状況を話します。幸い建物の被害は少なく、ライフラインもすぐに復旧したことから、市の要請で避難者を受け入れることになりました。「館内は人でぎっしり埋まり、正確な人数も把握できないほど。近くのひがし生涯学習センターの職員と一緒に泊まり込みで炊き出しをしました」と振り返ります。

生産者が直接売り場に並べる野菜や果物の他、野馬追の絵柄をあしらったタオルなど土産品も豊富

支え合いの心を胸に刻む

震災から4日後、半径20～30キロ圏内に屋内退避指示が出たことから道の駅は閉鎖され、住民は別の避難所へ移りました。但野さん自身も仙台へ自主避難しましたが、当時の駅長が自衛隊や警察、消防隊のため、毎日道の駅のトイレを清掃していることを知り、自らも4月1日には職場復帰。市内に留まる住民のため支援物資の支給や炊き出しなどを行いました。

6月1日には道の駅の営業を再開しましたが、200人ほどいた出荷者のほとんどが避難していることに加え、地元の野菜は安全性が認められるまで販売できないため、商品数はごくわずか。食事処は手に入った食材で作れるメニューを提供しました。

「売り上げが立たなくても早期の営業再開を決断したのは、店を開けることで住民に日常を取り戻してもらい、安心感を与えたかったからです」と但野さん。

震災後に整備された、道の駅裏手にある高見公園

道の駅「南相馬」では3月17日(日)まで同市出身の写真家・大槻明生さんによる、震災の記録写真展を行っています。「震災から13年経ちましたが、当時感じた思いや支え合いの精神は今でも大切に心に刻まれています。今後も地域の皆さんが安心して集える場を目指していきたい」と笑顔で話します。

所在地／南相馬市原町区高見町2-30-1
TEL0244-26-5100

南相馬市・大船渡市の震災伝承施設

第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮した施設）、第2分類（公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設）のみ掲載。

第3分類：
- **大船渡市立博物館** 大船渡市末崎町字大浜221-86
- **大船渡市魚市場** 大船渡市大船渡町字永沢209

Topics & Information

年々充実、アクセスもアップ 当機構のWebサイトのご紹介

当機構は2019年8月に発足、同年10月からWebサイトを開設し、情報発信を行っています。今回はWebサイトの変遷をご紹介します。

当機構ではサイト開設から（表1）のように更新を重ねてきました。

（表1・Webサイトの変遷）

実施年度	主な実施項目
2019年	Webサイト開設、Facebookのリンク追加
20年	研修会ページ追加、英語版Webサイト作成、スマホ対応
21年	映像アーカイブ作品、Movie（動画関連）ページの追加
22年	機関誌、ラジオ番組ページ追加

Webサイト開設の翌年には、日本国内のみならず、海外の方にも興味・関心を持っていただくため、英語版のWebサイトを開設し、スマートフォンでの閲覧にも対応しました。その他、映像アーカイブ作品の公開やラジオ番組ページの追加など、機構の活動が広がるたびに、Webサイトでの情報発信も充実してきました。開設当初は約3400件だった月間アクセス数も、現在では約3万3000件もアクセスいただいています（今年1月末現在）。

昨年、新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことで、被災地への旅行者も増え、一般の方からの震災伝承施設についての問い合わせも増えています。震災伝承施設の関心の高まりとともに、当機構のWebサイトへのアクセス数も伸びていると考えています。

今年は機構設立5周年となります。まだまだ多くの皆さんに「3.11伝承ロード」を知っていただくため、Webサイトもより充実した内容にしていきます。ぜひ当機構Webサイトを引き続きご利用ください。

3.11伝承ロード推進機構
Webサイト

https://www.311densho.or.jp/

表紙

被災地を歩く

ハード、ソフト両面での備え　田老の防潮堤（宮古市）

新防潮堤から望む田老港（写真提供／宮古市）

1896年の明治三陸大津波で死者・行方不明者1859人、1933年の昭和三陸大津波で同じく911人を数え、壊滅的な被害を受けた宮古市田老地区（旧田老町）は、津波から町を守ることが命題となった。防潮堤の整備は1934年に始まり、58年に第一防潮堤が、半世紀近くかけて79年までに第二・第三防潮堤が完成した。X字型の二重構造の防潮堤で総延長2.433㌔、高さ10.65㍍の長大なさまは「万里の長城」と呼ばれ、防災のシンボルとなった。

通常の2階建て住宅よりも高く、頑丈な防潮堤は1960年のチリ地震津波では、被害を最小限に食い止めた。しかし東日本大震災では、地震発生から約40分後、防潮堤の高さをはるかに超える約16㍍の巨大な津波が襲来。第二防潮堤を破壊するなどして田老地区を飲み込み、121.2㌶が浸水した。

それでも防潮堤は、津波の威力を減衰させ、地区に流れ込むまでの時間を稼いだ。定期的に避難訓練が行われ、避難場所や経路の表示を設置するなど、さまざまな取り組みが進められてきた。何よりも住民の意識に「津波てんでんこ」が息づいていた。

破壊を免れた第一防潮堤は地盤沈下分をかさ上げし、原形復旧して新たに「第二線堤」となった。その海側に設けられた「第一線堤」は高さ14.7㍍と、これまでの1.5倍の高さとなった。「田老の防潮堤」は第3分類の震災伝承施設に認定されている。

所在地／宮古市田老字川向地内

伝承ロード縁　2024年3月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー
記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。　info@311densho.or.jp　FAX022-393-4271
無料